

# 明治家 実業列伝 ⑳

## 針生 庄之助

仙台市博物館 市史編さん室長 菅野 正道



### 挹翠館

二年後の開業を目指し、市内各所で地下鉄東西線の工事が進んでいます。その工区の一つ、かつて天文台があった西公園の一角で、地下鉄工事に先立って発掘調査が行われた際、思いもかけず、明治時代の建物跡が見つかりました。土台石や厨房の炊事場と思われる施設、各種の陶磁器等々が検出されたのです。

その建物は、挹翠館という料亭でした。明治十九（一八八六）年に作られた和風2階建ての建物は、仙台随一の社交場としてたちまち評判になりました。1階は一般客も使える料亭、そして2階は宴会や会議場として用いられ、時には劇場や政治演説の会場として、多くの観客を集めることもありました。

挹翠館では、和食、洋食いずれの食事も出していました。オープンして半年後には、7割の客が洋食を注文したという新聞報道が残されています。仙台には挹翠館以前にも洋食を出す店はありませんでしたが、挹翠館が洋食の普及に果たした役割は格段に大きなものでした。挹翠館以後、街中の洋食店は、競って東京から料理人を呼び寄せたり、本格的な洋食器を揃えたりするようになったそうです。

### 稀代の「才業家」

この挹翠館の設立、運営に大きな力を発揮したのは、俠客・針生庄之助です。文政十（二八二七）年に仙台城下の仲ノ町（かつて

市民プールがあった所）で生まれた庄之助は、魚屋を商売とし、問屋がある肴町に毎日のように通ううちに、「中庄」のあだ名でかわいがられるようになりました。肴町は、漁師との付き合いもあったからか「男気」を重視する町として知られ、俠客の親分や火消しが住んだ町でもありました。豪放磊落な性格だった庄之助は、そうした町の気質との相性が良かったのでしょう。

そんな庄之助が大きな飛躍のチャンスをつかんだのが、戊辰戦争でした。庄之助は、戊辰戦争直後に新政府軍相手の貸座敷をはじめ、これが大当たりしたのです。この貸座敷は、庄之助の通称をとって仙台初の遊郭「中正楼」となります。さらに庄之助は、新興の繁華街東一番丁に料亭「竹廻舎（後に「宮古川」と改称）」を開店し、明治十年には同じく東一番丁に寄席の劇場である「大新亭」もオープン。庄之助は繁華街の経営者として押しも押されぬ地位を築きあげたのです。

庄之助の活動はこれにとどまりませんでした。明治九（一八七六）年に宮城県初の博覧会として宮城博覧会が開催され、支倉常長の肖像画もこの時に初めて公開されたのですが、庄之助は主催者の一人に名を連ねています。また、仙台の東郊・南小泉の地に広大な梨畑を開き、この地域の農業振興に大きく貢献しています。このようにさまざまな企画を実現する庄之助は「才業家」とも評され、もはや俠客というよりは、仙台を代表する実業

家の一人となったのです。

### 広がる人の輪

多種多様な事業に手を広げた針生庄之助は、仙台で随一のイベント会場となる挹翠館設立に際して、その手腕を見込まれて「営業人」に挙げられ、その経営を担いました。

その後、庄之助が挹翠館を任せましたが、庄之助と義兄弟の契りを結んだ針生惣助。彼は戊辰戦争の時に仙台の俠客等で組織された衝撃隊（通称「からす組」）で活躍した人物としても知られています。

同じように庄之助と義兄弟になった人物に、針生（旧姓福島）久助がいます。久助が国分町に開業した旅館「針久」は、有名旅館に発展。この針久旅館は、二代目針生久助の時に仙台駅前や東京にも支店を構え、東日本を代表する旅館チェーンにまで発展しています。

近年、俠客が社会の中で果たした役割が、ダークサイドだけでなく、さまざまな面に及んでいたことが、日本史研究の中でも評価されています。針生庄之助の活動も広く経済界の輪に結び、仙台の近代化に大きな役割を果たしたと評価することができます。



大正時代の針久旅館本店（宮城県図書館所蔵）  
国分町にあり、仙台駅前の別館、支店とともに、来仙する多くの著名人が宿泊した。

# 仙台市史

好評発売中

## 特別編4 市民生活

明治以降の人々の暮らしを、豊富なカラー図版とともに紹介

◆B5判 620頁 オールカラー ◆定価6000円(本体5714円)

お求め先 県内主要書店・仙台市博物館／株式会社宮城県教科書供給所  
TEL.022-235-7181 FAX.022-235-7183

お問い合わせ先 仙台市博物館市史編さん室  
〒980-0862 仙台市青葉区川内 26 番地 TEL.022-225-3074



西公園にあった挹翠館（ゆうすいかん）  
明治19年に作られた料亭で、明治42年に仙台市が買収して市公会堂となった